

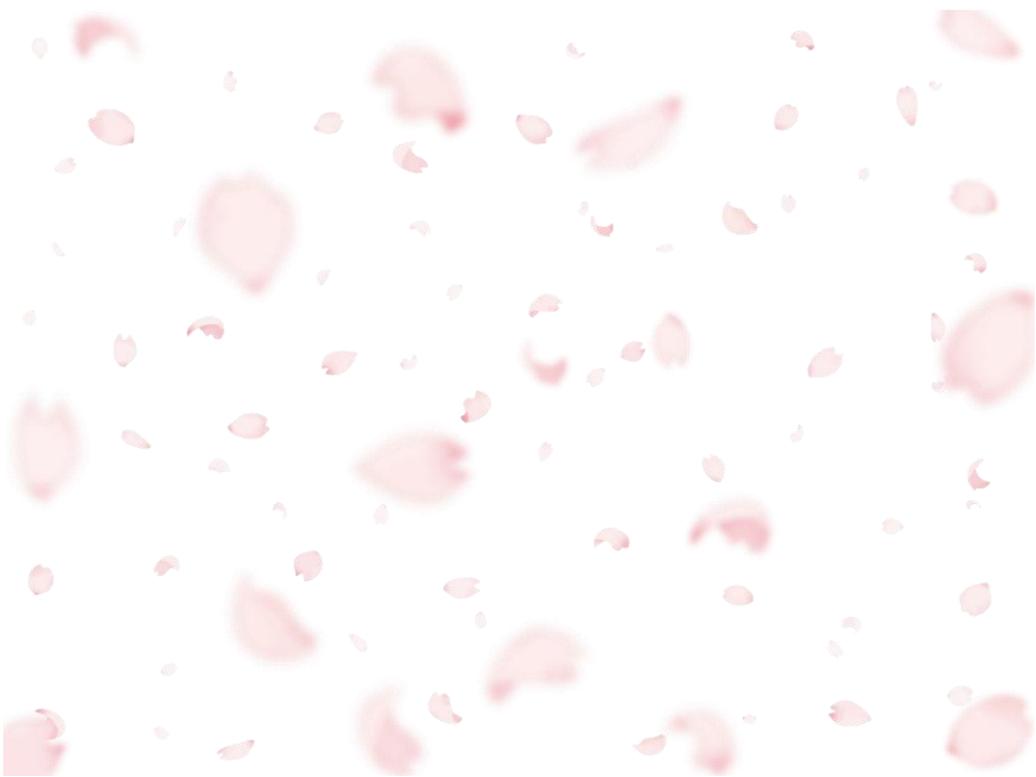


# ハ ル ウ ラ ラ

BSD  
R18  
NOVEL

よいこの  
現代文DN

※成人向



# ハルウララ

繪子

春の陽を受け、校舎の廊下はまっすぐ道標みちしるべのように輝いていた。

誰かが閉め忘れていったのか、窓から桜の花びらが吹き入り、閉めようとガラスに触れた中也の指先にもふわりとひとひら着地した。

快晴の空へと返し、心地よい風を髪で感じたら、自然とあくびが出る。

「春うらら……」

太宰にめちゃくちや犯されたい。

字余り。中也は窓を閉めて、肩にも付いていた花びらを手で払い、変装用の鼈甲眼鏡を掛け直すと、次に授業をする予定になっている教室へと歩き出した。



自分が被虐性癖マゾヒストだと自覚したのは四年前。幸運なことに、そして不幸なことに、自分をそのように至らしめた男が忽然と姿を消した後だった。

当初、太宰がいなくなったことで俺の生活の質は格段に向上したように見えた。

予定を立てたら予定通りの一日を過ごせたと、体の中におかしなものを入れられた

## 鼈甲眼鏡

「中原中也 プレート  
バッジ」でGoogle検索  
すると出てくる中也が  
掛けている眼鏡。

## 被虐性癖

masochism。相手から  
精神的、肉体的苦痛を  
与えられることによつ  
て性的満足を得る異常  
性欲。マゾ。

まま任務に行かなくて済むし、服の下を麻縄で縛られたまま会食に連れていかれることもないし、戦闘中に耳に装着したインカムから情事中の自分の声の録音を聴かされることもないし、大量に押し付けられた書類仕事を息も絶え絶えに終わらせ、やっと自分の部屋に帰り着けば、ご主人さ……まちがえた、太宰の野郎が不法侵入しているなんてこともなかったから。

それはそれは快適で、平穏な日々だった。

「——奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。……さて、『昨日までの我ならぬ我』とは、どういうものか、答えられる奴はいるか？」

はい、はい、と数人の女生徒が手を挙げる。

この女子高に現代文の教員として赴任した初日、俺の指導役として付けられた古文の教員からは、「みんな今は塾の勉強優先ですからね、学校の授業なんて全然聞いていないんですよ、だから適当でいいんですよ、適当で」と言われた気がするが、言われなくてもテキストウにしかやりやうがないド素人の俺の授業を、皆真剣に聞いているように見える。なんだか申し訳ないくらいだ。大学どころか小学校を出た覚えすらない俺から教わったって、受験に役立つことは一つもないに違いない。

「親や目上の人間の言うことに従い、人に褒められることに喜びを感じ、自主性に欠けていた今までの自分のことだと思えます」

と、黒髪を頭の後ろで一つに束ねた女生徒が答える。

## 舞姫

森鷗外「舞姫」集英社  
〈集英社文庫〉。ドイツに留学した主人公の日記の形をとり、ドイツでの恋愛経験を綴った短編小説。現代文の教科書によく登場する。

## 現代文の教員

国語の教員免許があれば現代文も古文も教えられるはずだがこの高校では現代文と古文で担当教師を分けているというのでお願いします。

「うん。じゃあ、この続きから読んでくれ」

女生徒は起立したまま教科書を両手で持ち、続きを朗読し始めた。

自分の手元の教科書は教員用ということで、彼女たちが使っているものと外側の体裁は同じだが、中身はほぼ全ページに蛍光ピンクの文字でさっき自分がしたような質問の例や、指導の要点が書き込まれている。

この学校に潜入調査をするにあたって、さすがに二十二歳で学生役はないだろうと思いい（中也さんなら中学生でも余裕っすよ、と言った立原には俺の留守中の仕事の中でもかなりハードなやつを振っておいた）、かといって高校の教師役が務まるほど真っ当に知っている教科もなく、英語か国語かで迷った結果、生徒からの質問が一番少なそうだという当て推量で国語の教員免許を偽造させた。

最初の週は他の教員の授業やホームルームを後ろで見学したり、校内を案内してもらったり、この学校の教育方針やら決まり事についてあれこれ説明を受けているだけでよかったのだが、次の週からはクラス担任は持たないまでも、授業は担当しなければならなくなった。俺が想像していたよりも、教師というのは実践主義な職業であつたらしい。

あまり長居していると、さらに仕事を増やされるだろう。そうなる前に目当ての情報入手しておさらばしなくては。——武装探偵社の連中よりも先に。

「『されど我脳裡に一点の彼を憎むこゝろ今日までも残れりけり。』……………あの、中原先生、読み終わっちゃいましたけど……」

#### 潜入調査

文スト二次あるある。  
原作世界線のままで別の衣装を着てほしい時に大変便利な設定。

「ん、ああ。ありがとう。座っていい」

教室の壁時計を見ると、ちょうど授業が終わる五分前だった。

「少し早いけど、今日はここまで。次回は最初に小テストをする」

日直はいるかと呼ぶと、教卓を挟んで自分の真正面の席に座っていた生徒が「はい」と返事して立ち上がったので、少しばつの悪い思いをした。

「起立。礼。ありがとうございます」

仕立ての良い紺のブレザーに身を包んだ少女たちが一斉に立ち上がり、俺のような男に頭を下げて礼を述べる。そのアンバランスな光景に思わず苦笑いした顔を見られぬように教室を出た。

やはり、長居するべきではない場所だ。



「だから『舞姫』だよ、適当にそれっぽいテスト作って俺の端末に送っとけ。ネットに落ちてるやつは使うなよ。ああ？ 知らねえよ自分で考えろ」

三階の廊下の突き当たりにある国語科準備室で一服しながら専用回線で部下に連絡を取る。俺はここでの仕事が終わった後もポートマフィアに戻って、幹部の自分できないと承認できない書類仕事などを片付けなければならないのだ。愚直に高校生のテスト問題なんぞ作ってられない。

部下の泣き言を聞き流していたら、誰かが廊下を歩いてくる気配に気付いた。  
「……切るぞ。今日中に送っとけよ」

無理ですう、と言う情けない声を無視して通話を切り、履歴を消去した。

「おつかれさまで……うわあ、煙けいい！ 中原先生ですか……」

木戸をからからと鳴らしながら入って来たのは、この部屋を俺と共同で使っている古文の男性教員だった。部屋に一歩足を踏み入れるなり鼻をつまんで後ずさり、廊下に誰もいないことを確認すると、また慌ただしく中に入って来て戸を閉めた。

この準備室という部屋は、各教科の教員が授業で使う教材や生徒からの提出物を保管しておくための部屋らしいが、国語科の準備室は現代文と古文の相部屋になっていた。この男が俺の指導役にされたのも、そのへん便利そうだからなのだろう。

仮初の教師にすぎない自分にとって、保管しておきたい物など職員室の机の上のスペースだけで事足りているし、そういう意味では相部屋であることに不満はないのだが、いかんせん、学校というのは敷地内に煙草を吸っていい場所が一つもないので、こうしてここでこっそり吸っているのを見つかる度に小言を言われるのだけが少々面倒であった。

「病院だって外に灰皿ありますよ。ちゃんと換気しておきますから。ね？」

「ね？ じゃないでしょ。はあ……こんな問題児の教育担当にされるなんて……」

「大袈裟だなあ。先生に教えられた通りに授業もしますし、煙草だけでしょ？」

「何を言ってるんですか。髪はオレンジ、ネクタイの色はピンク！ もうちょっと華

ピンクのネクタイ

「中原中也 プレート

バッグ」やGoogle検索

すると出てくる以下略

美でない服装で来てくださいと昨日もお願いしたのに……」

中原先生は私のことをなめているんです、としゃがれた声で言って、彼は窓際の一人掛けソファに座っていた俺の斜め向かいのストールに座り、うなだれた。

「そんなことありません。ただちょっと……前にいた学校よりも厳しい校風なもので、まだ慣れていません」

先生には感謝してますよ。と窓のサッシにこすり付けかけてやめた吸殻を、携帯していた革巻きの灰皿に落としながら、声をかけた。

「……………中原先生が前にいた学校って、どちらでしたっけ」

「え？ やだな、初日に話したじゃないですか。山口県の××高校ですよ。まあ、文でも武でも名を上げない荒くれの集まりですから、ご存知ないかな」

「不良高校ですか……すごいですね」

「何がですか？」

「私がそんな学校に行ったら、きっと初日で身ぐるみ剥がされてしまいますよ……。中原先生はそこでも特に問題は起こしてこなかったと校長から聞かされていますし、この生徒たちからもすぐに慕われて……。初めて見ましたよ、国語科準備室に質問に来る生徒なんて」

「ああ、やっぱりこの生徒が特別真面目だったことですか」

それじゃ都合が悪いんだがなあ。と、俺は心中でぼやく。

芥川を行かせた男子校の方に行くべきだっただろうか。てっきり太宰はこっちに来

#### 山口県

文豪の方の中原中也の生誕地。中原中也記念館では中也の帽子が売られている。汗吸いの部分は金属ではない。

ると踏んでいたから、そうなれば芥川じゃ簡単に出し抜かれる。そう思っていたのだが、こっちに現れたのは国木田という別の探偵社員だった。情報によると元数学教師らしい。それなら教師のフリなど楽勝だろう。適任だ。

芥川の方には人虎が現れたと報告があった。学生として潜入させたのだが、向こうの考えることも同じで、同級生になってしまったらしい。あっちも騒ぎを起こす前にさっさと撤収させた方が良いかもしれない。無論、情報を集めてからだ。

「そういうことじゃないんです。好かれてるんですよ、あの子たちから」

中原先生は格好いいですから……と、最後の方はほとんど聞き取れないくらい音量で古文教員は言った。

「ははは……」

なんだこいつ面倒くせえな。常に酒焼けしているかのようなガラガラ声のうえにボソボソ喋られたのでは、仕事の思案の片手間に話を合わせるのも一苦労だ。おまけにいつも長ったらしい前髪で目元が覆われていて表情も読めないし、そんな陰気なナリして口数ばかりやたらと多い。

しかし、この学校に在る間は、この男からの指導が順調に進んでいる風を装うのが得策だ。この国語科準備室は行動拠点として理想的だし、一对一のメンター制も好都合。なんせこっちは武装探偵社とポートマフィア、どちらが先に標的を捕らえられるかという遊戯ゲームの真っ最中なのだ。そのための情報収集に必要な範囲以外の人間関係を割いている時間などない。

#### 国木田君の前職

現在二十二歳で「太宰治の入社試験」のときは二十歳……あれ？なんて考えてはいけない。

「先生も、少し身なりを整えられてはどうですか。いつも同じカーディガンで、髪だつてぼさぼさじゃありませんか。教師が華美なのはいけないのかもかもしれませんが、地味が過ぎるのだつていけません。折角そんなに長い手足を持っていらっしやるのに、もつたいない」

「な、やめてくださいよ。そんなお世辞……」

「お世辞なんて言いませんで」

ついでに喉も治した方がいいと思うが、生まれつきの疾患とかデリケートな話題かもしれないのでそこには言及しないでおいた。

「その猫背も、腰を痛めますよ。教壇にしゃんと立つだけで違います。ほら、そこに立ってみて。ね、先生。ほらほら」

ソファから立ち上がり一歩歩み寄ると、しゃがれ声でなにやら呻きながら彼もスツールから立ち上がった。いつも居心地悪そうに縮こまっていた背筋を伸ばすだけで、ぐんと見上げる目線が上がる。俺より二十センチくらい高いだろうか。

髪が邪魔で相手の目は見えないのに、その見下ろされる感覚に既視感があった。

「……いいですね。あとはその前髪を、切るか上げるかして——」

彼の眼前に何気なく手を伸ばした瞬間、ぱしんとその手を払われた。

「えっ」

驚いた。彼の過剰な反応にというより、自分がその挙動を読めなかったことに。

手が当たる寸前に反射的にかわしたので、実際には指先がわずかに当たっただけな

のだが、挙動が読めなかったから、咄嗟に回避してしまったのだ。素人の打撃なんて当たってどうなるものでもない。むしろ、ここではわざと強めに当たりに行くくらいの方が正解だった。

「あっ！ す、すみません中原先生。叩いたりして……」  
「……いいえ。俺の方こそ、急に触ろうとしたりして、失礼しました」

払われた方の手をわざとらしくもう片方の手で掴んで、ちょっと落ち込んだ風につむいて見せたら、彼はおろおろと両手を空中でさまよわせながらまたみるみる腰を低くし、子供に話しかけるような視線で顔を近づけてきた。

「面目ない……私は、自分の顔が、その……嫌いな、もので……」  
油断していたつもりはなかった。

民間人で格闘技の経験がありそうにも見えないこの冴えない男が、俺に悟らせることなく俺に向けて手を振り上げた？ そんなことがあるだろうか。

かたくなに顔を見せようとしなない態度もなんだか気になり始めてしまう。

ひよっとしたら、こいつなのかもしれない。

俺たちが捜している異能犯罪者、通称『死霊』しらいは。

十代の少年少女だけを狙う連続殺人犯で、連続と言ってもその犯行の間隔は数年に一度。次に現れる時期も場所も推測ができないため、警察も異能特務課も捕獲に失敗し続けている人物だ。年齢も性別も不明。元は男だったという情報があるが、仮にそうであったとしても、現在は男でも女でもないだろう。

そいつの異能力は、人間の死体を繋ぎ合わせて自分の体と入れ替える能力。

発動条件に含まれているのかは不明だが、最初に一度だけ民警に拘束されたとき、そいつの体には男性器と女性器が両方付いていたらしい。その後留置所から脱走し、現在に至るまで犯行を繰り返しているが、『死霊』に殺されたと見られている被害者には必ず男と女が含まれていることから、犯人を特定するのに有効な特徴であると思われる。

入手している限りの情報では、定期的に体を交換することで数百年ばかり長生きしているだけの迷惑な爺さんにしかな思えないのだが、特務課が何年も追っている奴なので、捕らえれば良い交渉材料になる。

それだけではない。武装探偵社の動向を探らせている部下からの報告で、探偵社もこいつを追い始めたこと知ったのだ。被害者遺族からの依頼があったらしい。あそこにいる頭の切れる名探偵が、どうやったのだか『死霊』が次に選ぶ狩場を二か所に絞り込んだ。それが、山手にある芥川を潜入させた男子校と、今俺がいる、この女子高というわけだ。

人命のかかったこの任務、探偵社の連中は何としても完遂しようとするだろう。そこに、犯罪者をどう扱うか知れない俺たちポートマフィアが介入すれば、絶対にポートマフィアにだけは犯人の身柄を渡してはならないと考えるはずだ。

そう、『死霊』を捕まえれば、特務課だけでなく、武装探偵社に対しても有益な交渉のカードになる。首領にそう話したとき、彼は俺に言った。

「景気のいい話だけれど、中也君が出れば、太宰君が黙っていなそうだねえ」

さすが首領<sup>ボス</sup>。それである。俺の目的はまさしくそれ。

武装探偵社の標的を横から掠め取ったのが中原中也だと知ったら、太宰は決して黙っていないだろう。どんな卑劣な手段を用いても標的を奪い返し、それだけではなく、必ず俺にお仕置きをする。

そのために来たのだ!!!

もし、今日の前にいるこの男が『死霊<sup>しらい</sup>』だとしたら、この勝負、ポートマフィアの、そして俺の勝ちということになる。

「——ははっ、やだなあ。そんなこと言われたら……顔をみてみたくありませんね」

俺は目の前のやぼったい蓬髪をじっと見つめ、そう言った。

「……………からかわないでください」

中原先生、と返ってきた声に妙な熱が灯っており、おや、と思ったときには顔を骨ばった大きな両手で包まれていた。今度はその動きを予測できた。予測はできていたが、……いささか予想外だった。

てっきり病的なロリコン野郎だとばかり思っていたが、ソッチが趣味だったか。

だが何か仕掛けてきてくれるなら話が早い。こいつが俺たちが追っている標的<sup>ターゲット</sup>だと分かれば、返り討ちにして拘束するだけだ。

「中原先生、目の下に隈ができてますね」

そう言って彼は度の入っていない鳖甲眼鏡を俺の顔から外した。

お仕置き

同義語↓わからセック

ス

「昔からです。眠りが浅いもので」

彼は眼鏡の蔓をたたんでスツールの上に置き、また俺の頬に触れた。薄いガラスに触れるかのようにそっと輪郭をなぞり、染みついた両目の隈を撫でてから、親指で俺のまぶたを閉じさせた。

「……嫌がらないんですか」

「ここの前は男子校だったって、俺、言いましたよね」

がらがらにしゃがれた声で「わるい人だな」なんて囁かれたものだから、吹き出すのを堪えるのが大変だった。まあ違いはない。悪い組織からやって来た悪い人だ。

ああでもやっぱり顔は見せてくれないんですか、と軽口を重ねようと開いた唇に、ふっと男の乾いた唇が触れて、ほんの一瞬で離れていった。

「あ……その、ええと、すみません、わわ、私は……」

「……いいですよ、別に」

「え、ええっ!?! いいいい、いいっていうのは」

俺は手の甲で男に触れられていた頬を拭った。緊張に汗ばんだ手だった。加えて、あの子供がするようなキス。何か毒を盛られたわけでもなさそうだ。

(……ハズレだったか?)

まあ考えてみれば、ガキのパーツを繋ぎ合わせたにしちゃ図体がでかい。するときっきのは、本当に下手の鉄砲数撃ちゃ当たるといふあれで、たまたま俺に気配を悟られずに手を振り上げたということだったのか。

それはそれでショックである。先日キルドの対組合戦で太宰に再会してからというもの、どうすれば自然な流れでまた太宰に犯してもらえるかということばかり考えて過ごしていたので、気が緩んでいたのかもしれない。

「……………煙草」

「え、」

ここで吸うの見逃してくれますよね？ とにっこり笑って言ったなら、彼はがくりと肩を落とし、か細い声で「ハイ…」と承諾した。ハズレではあるが、小言を貰うストレスが一つ減った。

「俺、あなたが指導役で良かったです。埴谷はにや先生」

そうですか、とまだ緊張で声を上擦らせている彼に適当な用事を頼んで部屋から追い出した。針金のような形状の小さな門を内側から掛けて密室にする。

こりゃあいい。童貞野郎にキスさせるだけで随分色々やりやすくなる。

まずは芥川の方の状況確認だな。

俺はオリーブ色のソファにどっかり腰を下ろして二本目の煙草に火をつけると、芥川に連絡を取るべく携帯端末を取り出し、耳に当てた。



ひょっとして俺ってマゾなんだろうか。

そう最初に思ったのは、太宰が消えてひと月後のある朝だった。

太宰一人が一日で片付けていた仕事は、太宰以外の人間が五人で取り掛かってもひと月以上を費やした。太宰が用意した盤上でちょっと暴れるだけで終わっていた喧嘩仕事も、作戦を立てて挑んでそれが失敗したらまた作戦を練り直して挑んで、という地道な陣取りゲームになり、日々は忙殺されている間に過ぎた。

ある日馴染みの女から連絡が来て、たまには女を抱いて寝ようと思いい、部下たちも休め休めとうるさかったから、その女の部屋を訪ねた。昔から眠りが浅く、夜中何度も目が覚めてしまう自分でも、誰かとセックスした後は不思議と少しだけ深い眠りを得られていた。

彼女は中華街で占い師を営んでおり、昼の人間とも夜の人間とも複数関係を持っていた。俺は数いる男たちのうちの一人で、それが都合良かった。

俺が気まぐれで与えたものを彼女は気まぐれに受け取り、彼女が気まぐれで求めてくるものに俺は気まぐれに応じた。互いに気が向かなければ連絡もしない。躰の相性も良かったから、十七のときに知り合ってから連続していた。

その夜も、少し酒を飲んでセックスをして、二時間だけ寝て部屋を出た。

朝四時のコリアン・タウンは、気の抜けたレモンサワーの匂いがした。

川べりに座り込んで虚空を見つめている青年、破れた古新聞に罵声を浴びせている老人、その横を通り、空缶と弁当の容器と煙草の吸殻が散乱している橋を渡って、黒ずんだ煉瓦風の壁の前で足を止めた。実在しない人間の名前が書かれた司法書士事務

#### 福岡町

桜木町駅の近くの川沿いに少し歩くと現れる退廃的な雰囲気ムンムンの歓楽街。ソープレンドがめちゃめちゃ多い。どこを見てもソープレンド。韓国系の飲食店が多くコリアン・タウン化している。

所の白看板が掛かっている。

どこにでもありそうな古いシャッターの鍵穴はフェイクで、横にスライドさせると指紋認証端末が現れる。淡く緑色に光るその端末に人差し指をかざすと、シャッターがゆっくと天井へ巻き取られていった。

中はガレージになっていて、自分が所有している車が置いてある。その奥の扉を開けて二階へ上がり、小さな冷蔵庫とベッドしかない部屋に入ると、俺は脱いだ黒外套をベッドに放って寝転んだ。

いつも寝に帰っている部屋よりも、ポートマフィアの執務室よりも、ずっと天井が低い位置にあり、そのせいか物もないのに窮屈に感じた。しばらく来ていなかったから、空気が埃っぽい。

「……………」

(やあ。また二時間しか寝てないの?)

幻聴がした。俺がこの隠れ家で寝るとき、何度も邪魔をしに現れた太宰の声の。

女を抱いた後にこの部屋に来れば、まるで予め約束していたことのように、俺がそのとき一番欲しいものを与えてくれたあいつの。

そうか。あいつはもうここへは来ないのか。

「マジかよ……………」

嫌いだ嫌いだと思っていた。本心だ。今だって、会いたいと思っているわけじゃない。むしろ会いたくない。なのに、足はひとりでこの場所を目指していた。

ワインは店に行けば買える。暴れたければ任務で先陣を切りゃあいい。でも、太宰が俺に教え込んだ苦痛は、あれは、どこに行けば貰えるんだ。

「……いいさ。手前じゃなきゃ駄目なんて理屈は無え」

それから俺は、組織に関わりのない人間の中から、男、女、年上、年下、容姿も問わずに、俺を虐めてくれそうな相手をしばらく探し続けた。

何人目かとのブレイの最中に、「はあ」と洩れた自分の溜息が思いの外大きくて、それに自分でびっくりした後、びっくりした自分に自分でウケてしまっ、それですっかりばかしくなった。

理屈はない。理屈はなくても、太宰でなければ駄目だった。



「そして二人はその扉をあけようとなりますと、上に黄いろな字でこう書いてありました。『当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください』……」

昨日樋口に作らせた『舞姫』のテストを解かせただけでは時間が三十分も余ってしまつたので、俺はその次のページから始まっている別の教材をまた生徒に朗読させて適当にやり過ごしていた。

昨日読んだ話よりも、頭に浮かぶままを書いていような文章で分かりやすいなど思った。それにしても国語というのは、高校では現代文というのか？ いったいなぜ

#### 注文の多い料理店

宮沢賢治『注文の多い料理店』新潮社（新潮文庫）。児童文学の短編集であり、またその中に収録された表題作の童話。小学校の国語の教科書にはよく出てくるが高校の現代文に出てくることはたぶらない。文豪の方の中原中也が文豪の方の宮沢賢治の大ファンであったことは有名な余談。

登場人物の心情や行動を問題にして、正解を用意したりするのだろう。どこにもそれが正解ですとは書かれていないのに——いや、俺が今手に持っている教員用の教科書には蛍光ピンクの文字でびっしりと書かれているのだが。

「……紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりになおりませんでした。……あの、先生、また読み終わっちゃいましたけど……」

「ん、ああ。ありがとう」

朗読していた生徒を座らせ、教室内を一度見回してから、昨日の日直をしていた卓の前の席の生徒に質問をした。生徒たちの名前は昨日覚えた。

「二人の顔が元に戻らなかったのは何故だと思う？」

生徒はたっぷり十秒ほど考えてから、「そのときの恐怖感が消えていないから、でしょうか」と自信なさげに答えた。

蛍光ピンクの文字で書いてある答えは、「二人は外見ばかり気にしていたので、悪戯に動物の命を奪おうとした罰として、顔をくしゃくしゃの紙屑のように変えられた」というものだった。罰？と、思わずふふっと笑ってしまう。すると、答えた生徒が自分が笑われたものと勘違いして「すみません」と小さな声で言った。

「ん？ いや、答えは間違っていない。圧倒的な戦力差の前にビビって帰った奴ってのは、その後もずっと負け犬の顔をしている。誰から与えられたか分からない罰よりも、そっちの方が俺はしつくり来るよ」

俺が「罰」という言葉を出したことでピンときたのか、数人の生徒が同じ質問に答えようと次々手を挙げた。適当に指名すると、教員用の教科書に書いてある答えとほぼ同じ内容を答えた。罰の部分を「バチが当たった」という言い方にしていった。

あの埴谷という教師が言っていた通り、似たような授業を、いや、少なくとも俺のよりは余程ためになる授業を塾という場所でも受けているのだろう。学生ってのは効率が悪くて大変だな。

「あー、その答えでもいい。もしテストに今の問題が出たらそっちの方で書いとけ」  
なんでですかそれ、テスト作るの先生じゃないですか、と教室に笑いが起こる。

「次の試験までに俺がクビになってたららの話だよ」

「えー！ そしたらハンニャの代わりに古文担任してください」

「ハンニャ？ ああ：埴谷先生のことか。あほか、俺が古文なんか教えられるわけねえだろ」

国語教師なのにおっかしい！ とまた生徒たちが笑う。

この現代文という教科ですら、ただ文字を読ませて質問するだけといういいかげんな授業をしているからやり過ぎているだけであって、古文とやらはまず文字を読んでも意味が分からない。

埴谷の授業を見学したときには『伊勢物語』という話を埴谷自らが教壇で読んでくれているものが、しゃがれ声で聞き取りにくい上に、言葉遣いが普段自分たちが会話で使っているものとは似ているようで全然違う。途中から今どういう状況になっているの

#### 伊勢物語

「伊勢物語」岩波書店  
へ岩波文庫。平安時代  
に成立。作者未詳。  
仮名文と歌で綴った短  
編の歌物語を集めた歌  
物語集で、ある男の元  
服から死にいたるまで  
を描いた一代記的物語  
になっている。

か分からなくなるのだ。見学中何度も寝そうになったが、生徒たちはそんな俺を時々くすくす笑いながら見ていた。

「今思えば、やっぱり先生の授業だつてみんな真面目に聞いていたじゃないですか。見学させてもらった日、誰も居眠りしたりしていませんでした」

「中原先生はよくおやすみでしたけどね」

「は……すみません。割といつも寝不足なものでして……」

国語科準備室のソファに腰掛け、自分の前に立っているであろう男に話しかける。

であろう、と言うのは、埴谷が「やっぱり自分の不細工な顔を見られるのは恥ずかしいので」とか何とか言つて目隠しをさせてほしいとしつこく頼んできたからだ。視線と息遣いだけで、そこに男が居ることは分かる。

「生徒たちも、普段はぐうぐう寝てますよ。あの日は、中原先生が教室に居たからでしょう。『昔の若人は、さるすける物思ひをなむしける』……そういうことです」

そういうことですよと言われても、やはり意味が分かりそうで分からなかった。

「この布、そのカーテンの留め布とかじゃないですよね」

「体育祭の備品のハチマキです。余っていた未使用の物ですから綺麗ですよ」

「そうですか………で、まだですか？」

「まだ、とは？」

「いや、ですから……」

「昔の若人は……」

伊勢物語第四十段「すける物思ひ」の一説。

口語訳は「むかしの若者は、そういうひたむ

きな恋をしたものだった」(田辺聖子訳「竹

取物語・伊勢物語」集

英社文庫)

昨日と同じことがしたいならさっさと済ませてこの部屋から出て行ってほしい。

しかし、キスを急かすのはまるで俺の方がしてほしがっているように聞こえてしまうし、この部屋から出て行かせようとしていることを強調すると怪しまれてしまう。

ここで煙草を吸うだけなら別に、嫌煙家の彼が勝手に出て行けばいいのであって、俺の方はいってもらっても問題ないはずだからだ。

「俺、次の授業が」

「中原先生の次の授業まで、あと四十五分と二十秒ありますよ」

「えっ……なんで把握しているんですか」

「メンターですからね」

そう、次は授業が入っていないからその間に『死霊』<sup>しれい</sup>の調査を進めようと思っていたのに、一服しに立ち寄ったばかりにこんなところで足止めを食ってしまった。

学校のあちこちに仕掛けておいた監視カメラの映像を分析させた部下から、怪しい言動をしていた教員や学生のリストが送られてきていた。そいつらに聞き込みをすれば、この学校の周辺で何かおかしなことが起こっていないか情報を得られると思ったのだが、まずはこの男に怪しまれないよう部屋を出て行かねばならない。

「埴谷先生はこの時間、授業じゃなかったでしたっけ？」

「……………」

おいおいだんまりかよ。もう、多少険悪な雰囲気になってもいいか。

「あの一、煙草吸いたいんで、…目隠し、取りますね」

一応そう断ってから、自分の両目を覆っている黒い布に手を掛けたとき、コッソ、と硬質な靴音が一度響いた。思わず全身が固まる。

(何だ……この感じ……)

気を取り直して再び指先をくいと曲げ、右目に掛かっていた布をずり下げると、足元に見えている男の革靴がまたコッソッと床を蹴った。

目線を上げようとした瞬間、彼の大きな手がゆらりと俺の視界を遮り、右目のまぶたを指先で塞いだ。長い指先が薄い皮膚の上からやさしく眼球を押し込んでくる。様子がおかしい。なにか言わなければと口を開けたら、かじり取るようにして唇を塞がれた。ぬるりと舌が入ってくる。

「ちよっ……ん、ぐ」

(調子にのんなよ童貞野郎！)

ソファに片膝を乗り上げて自分に覆い被さってきた気配の元を右の拳でどついてやったが、男はこほっと咳き込みながらも懲りずに口付けを深くする。

手加減はしたが、確実に肋に入ったはずなのに、どこで根性見せてんだ。

舌を噛んでやろうかと迷っている間に、口蓋をこすり付けるようにねぶられて、ひくんと軀が震えた。それに気をよくしたのか、スラックスの上から手の平で股間を撫でられる。

「中原先生……たばこ、吸うなら火をつけさせてくれませんか？」

「は……？」

「一度やってみたかったです」

これ以上してきたら蹴り飛ばそうと思った矢先、不埒な手は離れ、埴谷は目隠しを直してから俺の背広の襟をとんと叩いた。煙草の在処を尋ねるように。

「いいですけど……休憩時間なくなるので、それで終わりにしてくださいね」

「はい。あ、私に取らせてください。唾えさせてあげます」

背広の内ポケットを探ろうとした俺の手を掴んで下に降ろさせ、自分が取るからと言って釦を外し、釦の付いている方の裏地をごそごそとまさぐり始めた。手首の骨ばった部分がシャツ越しに胸を擦り、ちよつと変な気分になってくる。

「そっぢゃ……ない……左の、内側……」

普通分かるだろ同じ男なら！

そう叫びたくなるのを堪えて教えてやると、ああそうか、そうですね、とどこか白々しく聞こえる返答をして、「その前にもう一度だけ」と今度ははっきり俺の左胸をシャツ越しに弄りながらキスしてきた。

「んっ、ふう……ん、く……」

ああこいつ、童貞じゃねえや。

キスを許したとき、アワワすみませんとか言っていたのは演技だったんだろうか。人は見た目によらねえなあ、と投げやりな気持ちになりながら、やたら自分の性感を刺激する手つきと舌使いに身を任せた。

「ありました。中原先生、そのまま口開けててください」

長いキスでさんざん擦り合わされてちょっと痺れてしまった舌の上に、馴染みの紙煙草が載せられたのが分かった。フィルターが湿らないよう唇を突き出して啜えると、顔の前でシュッとライターの花火が散る音がして、小さな熱を感じた。

煙が喉から肺に入り、また器官から外へ抜けていく。

「ありがとうございます。それじゃ、また後で」

何があるかとうございますだよ。嫌味のひとつくらい言ってやろうと俺が目隠しを外したのと、男が部屋の外で戸を閉めたのはほぼ同時のことだった。

「お疲れ様です。報告よろしいでしょうか」

「ああ……」

「後にいたしますか」

「あ、いや、大丈夫だ。話せ」

定時報告の通信に出た俺の声が疲れているのを敏感に察した芥川に気を遣われたので、俺は一度咳払いしてから続きを促した。

「では、まず一点目。こちらで男子生徒一名の被害が確認されました」

「なっ……そっちに現れたのか？ それでどうした」

「正確には『失踪』です。まだ殺されたかどうかは分かりません。それに、失踪したのは僕が潜入した日の前日。その生徒の家族から連絡がなかったため、一週間以上経った今になってようやく騒ぎになったというわけです」

「ただの無断欠席と思われてたってわけか」

もし奴に捕まったのだとしたら、少年の体を手に入れた後は少女の体も手に入れようとするはずだ。いや、今の芥川の話だと、こっちにも無断欠席や不登校扱いになっている被害者が既に出ている可能性もある。その場合は、奴の今回の犯行はとっくに終わっていたことになり、また次に現れるのは数年後となる。

頭が痛くなってきた。この任務を始めてからというもの、文字通り朝から朝まで教師とマフィア幹部のWワーク状態なものだから、流石に少し疲れが来たか。

「もう一点あります。これは人虎からの情報ですが」

「なんだ手前ら、トラブル起こしてるかと思ったら仲良くやってんのか」

「有り得ません。人虎が太宰さんと電話で話していたのを盗み聞きしただけです」

「太宰……あいつは、この件に関わってんのか？」

「そのようです。そちらに潜入しているわけではないのですか？」

「こっちに來ているのは国木田って奴だ。で、探偵社は何を掴んでる？」

「それなのですが、特務課の\*\*\*が武装探偵社と\*\*を\*たようで、これは探偵社\*\*\*でも意見が割れて\*\*ようなのですが、近々特\*\*\*\*者の介入\*\*\*  
\*\*\*います……」

急に、芥川の声が途切れ途切れになり、聞き取れなくなった。

「待て……芥川、通信が……」

通信が遠い、と言おうとしたが、聞き取れる部分の音量に違和感はなく、ノイズが

混じっている感じでもない。どちらかといえば、そう、あの退屈な授業を見学させてもらったときのような、自分の意識がぶつぶつと断線していくような。

俺は眠気覚ましに、指に挟んでいた煙草をまた深く吸い込んだ。

そろそろ指を焼いてしまうかもと自分の手元に視線を落とすと、吸いさしの先端がちりちりと妙な音を立てながら未だ燃え続けていた。それは例えば、湿気った線香花火に火を点けたときのような音である。

この煙草は、中の葉に何か、液体が染み込ませてあるのだ。

「中也さん？ 聞こえ\*\*\*か？ また扱点に帰\*後改めて\*\*\*が、取り急ぎ\*\*\*はもう一つ、『死霊』が元々郷里で名乗\*\*\*はハニヤユタカ。たしか、中也さんの潜入初日の報告に——」

ごん、と自分の体がソファからずり落ちて落ちて置物のような音を立てるのを、他人事のように静かに聞いていた。芥川が電話口で何か話し続けているが、強烈な睡魔に抗えず、ほとんど聞き取れなかった。



部屋の外が騒がしい。

人の来ない三階廊下の突き当たりまで、複数人の走る足音と話し声が届く。

落ちたぞ、とか、救急車、という単語が耳に入った。

被害者が出たのか。すぐに自分も行かなくては、と、立ち上がろうとしたとき、両脚がもつれて、受け身も取れずに俺はまた床に転倒してしまった。

拘束されている。感触からして革と金属製のベルトのようなもので、両足首、そして両手首も背中側に回されて縛られていた。顔も同じような素材のもので目隠しされている。さっき埴谷に巻かれたものよりも分厚くて重い。

——埴谷。そうだ、あの男。芥川からの報告で名前が出た。

（『死霊』が元々郷里で名乗っていた名前は、埴谷雄高）

俺の勘は当たっていたのか。あのやろう、俺が自分を捕まえに来た偽教師だと気付いていて俺に気のあるフリをしていやがったな。それを見抜けずに侮った俺も俺だ。だが、今になって昔の名前を名乗って犯行に及んだ理由は何だ？

いや、今そんな考察をしても仕方ない。とにかくこの拘束を破って奴の足取りを追わなければ。舌打ちしながら両手両足のベルトを重力操作で底上げした力で強引に引き千切り、顔に巻かれたベルトにも手を掛けた瞬間のことだった。

国語科準備室のすぐ外の廊下で、話し声が聞こえた。

「それじゃあ国木田君、後は任せたまよ」

その声を聞いた瞬間、耳の鼓膜が震え、心臓が、電気ショックを与えられたようにどくと跳ねた。その場で胸を押さえてよるめく。

## 死霊

埴谷雄高「死霊」講談社〈講談社文芸文庫〉  
著者が全宇宙における《存在》の秘密を生涯かけて追究した思想小説。全十二章を構想し執筆されたが、第九章まで書き進められたところで未完のまま終わっている。タイトルの読み方は「しりょう」ではなく「しれい」。

「太宰、一つ答えろ。お前なら、死なせずに止めることができたんじゃないのか？」

国木田と呼ばれた男が、険しい声で訊ねた。

「やだなあ、怖い顔しないでよ。いくら私でもあれは無理。国木田君も見たでしょ。

突然渡り廊下のフェンスが外れて、中庭に転落した彼女の体が守護天使像の持っていた剣に貫かれたのを」

「……………ああ」

「聞いたことはない？ あれは、『殺人探偵』の仕業だ。昔、私が立てた計画を盛大に邪魔されたことがあってね、そのとき私が推測した彼の異能力は、対象を『事故死』させる能力。あらゆる確率を突破して、事故死といういわば運命を与える。だから予防も無効化もできない。仮に私が触れることで無効化できるとしても、『殺人探偵』は特一級異能力者として異能特務課から二十四時間監視されているらしいから、きっと、この場に来てもいない」

安楽椅子探偵というやつだね、と呑気な声で付け加える。

「特務課があれをやらせたと言うのか。『死霊』しれいは特務課にとっても何年も追っていた重要人物のはずだ」

「他の組織に渡るくらいなら——という判断をしたのだろうね」

「……………こちらの依頼者には、先ほど連絡した。娘の遺体に戻ってくるのなら、構わないと言っている」

「娘の一部、ね。国木田君、そういうことなら早く行った方がいいよ。特務課は『解

#### 殺人探偵

「文豪ストレイドック  
ス外伝 綾辻行人の  
京極夏彦」を読もう！

割した後に返す』と言うだろうが、私の予想では、返ってくるのは十割の確率で別人のパーツだ」

「なぜ、そんなことを」

「『死霊』は少なくとも三百年以上生きています。埴谷雄高という名前は、彼が最初に逮捕された時点から遡って数年の間たまたま長く名乗っていたものにすぎない。餌に食いついたということは、奴なりに何らかの思い入れのある名前ではあったのだから、ね。つまり、奴が生きて外を歩いていることそれ自身が、我が国の政府にとって深刻な機密漏洩になるということだよ。骨の一本にも、どんな秘密が隠されているか分からない」

「……俺は先に行く。お前は事務所に戻ったら報告書を書いておけよ」

「書いてもいいけど、消されるか盗まれるかと思うよ？」

会話はそこで終わり、廊下にあった二つの気配のうち、一つは足早に走り去っていった。もう一つの気配は暫く動かずそれを見送った後、ゆっくりと戸を開けて、室内に入ってきた。

「お待ちせしました先生。あれ？ 手と足のベルト、取っちゃったんですね」

コツン、コツン、と踵を鳴らしてこちらに近付きながら、行儀が悪いなあと感情の読めない声色で言った。その声は、口調こそあの教師と同じであったが、どもるところもしゃがれたところもない、まぎれもなく、太宰治の声だった。

「だぎ、」

「どうして立っているんですか？」

至近距離で、咎めるように靴音が鳴らされた。その瞬間、膝から下の力が抜け、俺はその場にへたりと座り込んでしまう。

「ふふ。二時間くらいは眠れました？」

不意に無邪気に笑う、その仕草。たまらなく懐かしい。

俺を馬鹿にして悦に浸るのではなくて、純粹に楽しそうに笑う表情に弱かった。それを見られるのなら、どんな醜態を晒した後でも割に合うと思ってしまうていた。

「……太宰。もういいだろ、目隠し外しても」

ゆったりとした足音は俺のすぐ隣を横切って、部屋の奥で止まった。

一人掛けのくすんだオリブ色のソファがきしりと軋む音がした。窓を背にして入口の真正面の位置に置かれているあのソファだ。俺がつい数時間前に座って煙草をふかしていたあの場所に、今は太宰が腰を下ろしている。

「なあ……」

今、あいつはどこを見ているのだろう。

窓の外をぼんやり見ているのかもしれない。携帯端末を眺めているのかもしれない。あるいは、目の前に座り込んでいる俺をじっと見ていたりするだろうか。

沈黙の時間がしばらく続いた後、不意に太宰が言葉を発した。

「中原先生、廊下で歌詠みをなさっていたでしょう」

「う、うたよみ……？」

「こんな風に校舎の窓から外を眺めて、『春うらら……』って呟いてた。その続きは聞こえませんでしたけど」

見られていたのか。いや、あのとき廊下には俺以外誰もいなかったはずだ。探偵社側が用意した監視カメラに撮られたか、あるいは俺たちが設置したカメラの映像を傍受されたかだろう。

太宰がなおも古文教師の言葉遣いで話すので、仕方なく俺もそれに合わせる。

「い：言ってたかもしれません。それがどうかしましたか？」

「実は、『うららか』だけで春の季語になりますので、『春うらら』は季語の使い方としては間違いになります。知ってました？」

「知りません……でした……」

「あっ。あと、そうそう、覚えてますか？ 先生のところ質問に来た女子生徒」

「質問……？ ああ、そういえばそんなこと……いや、太宰、そんなことより」

取引材料が死んだと分かった今となっては、そんなことはもうどうでもいい。

俺は教師じゃないし、お前も教師じゃないだろう。

今すぐにこの目隠しを外して、あの鶯色の目に見つめられたいのに。

「あの女生徒が『死霊』だったんですよ。今回の死霊、と言った方がいいかな。武装探偵社とポートマフィアがこの学校に潜入したときには既に、奴の今回の狩りは終わっていた。体が前回の被害者のものから入れ替わっていないことを考えると、運が良ければ被害者はまだ生きてどこかに監禁されているかもしれないね」

うららか（麗らか）

穏やかな日の光から心地よさを感じるさま。

主に春の天候に対して用いられるため、これ自体が春の季語となっている。しかし、音の響きの良さから季重なり（季語の重複）で使われることもある。

・春の日のうららにさしてゆく舟は棹のしづくも花ぞちりける

（『源氏物語』胡蝶の巻）

「なぜ……この学校に残って生徒のフリを続ける必要があったんです？」

「埴谷雄高を名乗る男が、自分の前に現れたからですよ。……ふふ、えらいですね。今回はちゃんと寝ないで授業を聞けて」

急に褒められた。面白がられている。

太宰には分かっているのだ。俺がしたいことの何もかも。

目隠しを外したい。でも、太宰の許可なく最後の拘束まで外して、機嫌を損ねてしまったら、たちまちこの遊戯はお開きになる。太宰は気難しく、気分屋で、自分が楽しいと思っただことしかない男だ。

「『死霊』は何年も姿を変えて生き、時には十数人の死体を繋ぎ合わせた巨体の姿で現れたこともある。軍人だったとも、何代か前の総理だったとも言われ、この国が秘匿し続けてきた闇の歴史の生き証人でもある。そんな男が、唯一べたべたと残してしまった足跡が、埴谷雄高という名前だった」

這い蹲ってここまで来られますか？ とやさしい声音で誘われた。俺は目隠しをされたまま、声のする方へ四つん這いになって進む。

「直接私を訪ねてくればいいのに、同じ準備室にいる中原先生をダシに使って接触してきた。怯えているように見えた。突然現れたかつての己の死霊に」

太宰の靴の先に俺の指先がっんと触れた。咄嗟に手を引っ込めると、「いいよ」と柔らかい口調で許された。大きな手でぐいっとな顔を上げさせられたかと思うと、耳の後ろでばちんと留め金が外された音がした。

両目を塞いでいた革のベルトが、あっけなくばさりと床に落ちる。

「眠っていてもらったのは、一つはポートマフィアに邪魔をされたくなかったから。もう一つは、変装の一環で声を変えるのに薬を飲んでいたので、その効き目が切れるまで待っていてほしかったのだよね」

彼は毛玉だらけでくたくたのカーディガンを脱ぎ、安物のネクタイも放り捨てる、やっと一仕事終わったという風に息を吐き、俺と同じ銘柄の煙草のパッケージをくしゃりと潰して一本取り出すと、それを口に咥えて髪をかき上げた。

「……太宰だ……」

「太宰だよ。なあに、中也ってば、そんなに私に会いたかった？」

「全部分かってんだろ。意地張る気にもなんねえわ……」

「健気だねえ。……って、褒めてあげたいところだけど」

太宰は口に咥えた煙草の煙をくゆらせながら、スラックスのポケットから万年筆のような形状をした伸縮性の指示棒を取り出した。すらりとそれを伸ばすと、鞭のようにならせて、俺の太腿を強かに打つ。

「……ッ！ なん、で」

「知らないでも思ってる？ 私がちょっと留守にしていた間に、随分どろんこになって遊んでいたみたいじゃないか。男も女も見境なく」

指示棒の先端は冷たい銀色の金属で、それが俺の耳の下から頬の骨をなぞって喉仏をつつき、胸の上をいやらしく動いてから、下腹をぐっと押しつけてくる。

#### 同じ銘柄の煙草

銘柄が同じというより  
中原の内ポケットから  
拝借した中原の煙草。

「まったく忠犬には程遠いよ、前も後ろも緩いのみだから。ほら、これだけでももう期待して膨ませてる。電柱にでも擦り付けているのがお似合いじゃない？」

太宰が靴を履いたままの足で俺の股間を踏みつけた。

「あっ、あっあ、……ふうっ……ひゃ、め……っ」

「やめて？ そんな嬉しそうな顔して、人の言葉喋らないでよ」

太宰が指先で落とした煙草の灰が俺の髪にかかった。それで完全にスイッチが入ってしまった。頭がぐらぐら茹だっていく。

「この煙草おいしくなーい。こんなもの吸いたさに好みじゃない男にまでキスさせてさ。最後までやらせてくれそうな雰囲気だったじゃない。あんなの見せられた後に会いたかったとか言われてもね。気持ちよければ誰でもいいんでしょ？」

「ちがっ……太宰、手前じゃねえと……」

「私じゃないと？」

手前じゃないと駄目なのだと、伝えたら次に来るのはきつと「何故？」だろう。けど、その問いには答えられない。自分にだって分からないのだ。

「答えないなら、気持ちいいのじゃなくて、痛いことしちゃお」

かちやかちやと音を立てて太宰が自分の腰のベルトを外す。その光景だけでも涎の出そうな俺は、確かにその辺で発情している野良犬と変わらないのだろう。

でも、他の人間にどんなことをされたって、俺はこんな風にならなかつた。俺をだらしのない犬だって言うんなら、そうさせるのは太宰だけだ。

太宰がソファから立ち上がった。俺は何も言われずとも彼に背を向けてもう一度四つん這いになり、尻を高く突き出す。

お利巧、と褒められて、首の体温がかっと上がるのを感じた。それとほぼ同時に、体に切り裂かれるような痛みが走る。

「あ、ぐう……！」

ベルトで尻や背中を鞭打たれる。その度に皮膚が裂けたのではないかと思った。

肌を伝っていく液体はやけに冷たく、それが汗なのか血なのかも自分じゃ分からない。中心にじくじくと熱が溜まり、その痺れるような痛みが体中覆われていく。

まるで自分という存在が、大きく広がっていくようだった。

「ううっ……たあ、はっ、はあっ、あー……もっ……と、シて……！」

「……いいよ。何して遊ぶ？」

だめだきもちいい。相手が太宰だと、叩かれてるだけですげえ気持ちいい。

でももっと欲しい。外側だけじゃ足りない。

もっと内側、ナカに欲しい。臓器を焼かれるような刺激が。

「ンッ……う、欲しい。だざい、中にもほしい……！」

「そう。だったら自分で抜けて見せて」

おいしくないなんて言ったくせに、二本目の煙草に火がついた音がした。待っていてやるから準備しろ、ということだろう。

俺は身に着けていたものを下だけ脱いで、自分の尻たぶを両手で開き、後孔に指を

入れた。

さんざん鞭打たれた肌は、触れると人間の体じゃないみたいに熱くなっていた。毛細血管が破れたところが点々と赤く、びりびりと痺れていた。爪が食い込むほど強く掴んでも、ほとんど感覚がしない。それに反して、中指一本舐めて潜らせただけで、中の粘膜はぐにやぐにやと蠢き、早く早くと焦れている。

「んんっ…は、っ、あ……」

自分の指なんかじゃもどかしい。すぐそこに、俺を世界一おかしくさせてくれる男がいるのに。こいつのがいい、こいつが欲しい。

慣らさなくていいから今すぐ入れてほしいという気持ちと、太宰の美しい顔に見下ろされながらイキたいという気持ちとがせめぎ合っていた。ここに太宰がいて、俺に触れていることを全身で実感したかった。

どうか今思えば、あのととき自分にキスしたのも、シャツの上から胸をまさぐってきたのも、どっちも太宰だったんじゃないか！ 古文教師の埴谷雄高は俺の指導役であつたから、ここの一週間と数日この部屋で何時間も二人きりで過ごしていた。それなのに、生徒の指導方法だとか、さっき言ってきたような季語がどうかいいうどうでもいい会話しかなかった。退屈で九割聞いていなかった。もったいない。この学校に赴任してきた日からやり直したい。

この潜入任務が終わったら、また別の理由を用意しなけりゃ会えなくなるのに。

「指が止まってるよ。もういいの？ 全然まだ痛そうだけど」

声をかけてきた太宰を顔だけでちらりと振り返り、俺は言った。

「太宰……おれ、今日は……正面からしてほしい……」

自分の中の素直に言っちゃえ勢力とそんなこと言えるか勢力による激しい抗争の結果、めったにない機会なのだから素直に言っちゃえ勢力が勝った。今までの経験上、こういうことをしている最中の太宰は割と俺の要望を聞き入れてくれる。

「中也……もう、そんなこと言って……」

太宰がジッパを下ろし、まだ固い窄まりにペニスを押し付けた。

「駄目に決まってるじゃん」

まだひりひりと痛む尻を掴まれて、強引に怒張を突き立てられた。ぴったり閉じていたそこを亀頭でごりごり掘り進められる。

「あ、あ、あっ！ 痛っ……てえ！ 前からがいいって言っ、この……くそ太宰……！」

「あれえ？ ご主人様にそんな口きいていいと思ってるの？」

発情期の犬のくせに。と、吐き捨てる口調の割に声は明るく、それでいて挿入は全然優しくない。前後にピストンされる度に骨盤がみしみしと軋み、脚もガクガク震えて崩れ落ちてしまいそうになる。けれどもその度に尻を持ち上げられ手の平で打たれ、崩れ落ちることも許されない。

「あ、うう、んッ！ ひっ……ッ！ ……待っ……ッ」

角度を変えて挿入され、感じる場所を狙ってトントン刺激される。

「ちゅう、や。はあ……ナカ、相変わらず……きついねえ……」

太宰が俺の首筋や耳にちゅ、ちゅ、とキスを落としながら、きもちいい、と呟いたので、俺のからだはそんなことで簡単にできあがってしまう。胎の中がきゅんと疼いて、太宰がもっと奥まで入れるように濡れていく。今のなんて、絶対俺に聞かせるための独り言で、俺がこんなになってしまっただけのこと。分かってやっているのに。

そしてそれを、そういうずるい男だっただけのことを、俺も重々分かっていっているのになあ。

「君のこと、抱いてあげるつもりなんてなかったんだけど」

ペニスズルズルと抜けていく感覚に、ああと勝手に声が出てしまう。

「幼い私の献身もむなし、そのへんの男や女で代用できるという結論に至ったのは、本当に救いようがないなって思ったし」

また、ずぶずぶと太くて長いものが埋め込まれていく。前立腺の上を擦りながら、胎の中の壁をこんこん叩いて、少しずつ奥を抜けていく。

「でも、ポートマフィアの拷問室で一回、Qの奪還作戦で一回、そして今回。三回も中也の方から会いに来てくれたとなったら、さすがの私も絆されちゃうよね」

「…はあ、あッんんっ、さい、しよのは、手前のほうから来たんだろ、が」

「私は情報を取りに行っただけけど？」 あれ？ ちゅうやイキそう？」

太宰の手が俺の腰を一層強く掴んだ。またぎりぎりまでペニスを引き抜いて、一息に奥を突かれた。自分の体液と太宰の先走りできるところに柔らかくなった粘膜の間を、外にまで聞こえそうなほど卑猥な水音を立ててかき回される。

「あああっくくく！ いいっ！、おぐっ、あた、……っう！」

自分の腹の下で揺れていた性器からびゅくくと精液が噴き出した。

「あらら、学校の床よごしちゃって。教育に悪い先生だ」

「うっぜ……手前だってゴムも付けてねえだろ」

「私は、んー……そうねえ」

よいしょ、と声を出しながら太宰が俺の腰をさらにぐっと引き寄せ、ソファの上に引っ張った。後ろから抱き締められる格好になる。

「私は、中也のナカに全部出すから平気。零さないでね」

「どっちが教育に悪いんだ、どっちが！ ……ちよ、やめ、脱がすな」  
「なにを今更恥ずかしがってるの」

太宰の脚の上に座った体勢で、後ろから回された手にシャツを脱がされる。乳輪の下に隠れていた乳首がかりかりと指でひっかかれて、少しずつ膨らんで出てきた。

そうしている間にも、うなじに優しくキスを落とされるので、なんだか恥ずかしくてたまらない気持ちになってくる。

「あ、そういえばその戸の内鍵掛けてなかったかも」

「なっ、おい！ 今開けられたらアウトじゃねえか、一回離せ……！」

「どうして？ 別に私たち、ここの先生じゃないでしょう？ 誰に見られたって、ああ中原先生っておしりで気持ちよくなっちゃう人だったんだなってことで、乙女たちの淡い恋心が碎けるだけさ」

そう言って、太宰は俺の首筋をがぶりと噛んだ。

「っ…手前は…：…そういや、女好きの手前が女子高であんな野暮天の変装しているとは思わなかったぜ。まんまと騙された」

「髪も、声も、『本当にあの人もかも』と思わせる余地が必要だったからね。君だつてこのくらいの距離でキスしても私だと気が付かなかったじゃない。シヨックだなあ、相棒の変装も見抜けないなんて」

「コレ、突っ込んでくれてたら気づいた」

「うわっ、最低〜」

自分の中にずっぷりとはまっている太宰のペニスを腰を揺らして味わう。やっぱり後ろから抱きかかえられているこの体勢じゃ動きづらい。乳輪をぐにぐに摘んでいたその両手から逃れて、ソファの背もたれに彼の体をより深く沈めると、「あ」と止めようとしてきたのを構わず正面から跨った。

「ちよつと、駄目つて言つたよ」

「知らねえ。顔が見たいつて言つてんだろ。手前にひどくされるのは好きだけど、せつかくなんだから顔見せしなきゃもつたいねえだろうが」

「もつたないつて…：…君ねえ」

そんなけちなお誘いじゃ勃たないよ、と不満げな顔して見上げてくる男の屹立を二本の指で挟んで、すっかり濡れそぼった自分の中へと導く。これは何だよ嘘つき、と言つてからかいながら。

「ッは…：…あぁっ…：…クッ…」

互いの陰毛が擦れ合ってくすぐったい。その茂みの隙間から、とてもこの涼しい顔をした男の持ち物とは思えない熱く鋭く荒くれた性器が突き出し、自分の後ろの穴にみっちり収まっていた。

「……はあ、ッ、あッ、うう……」

「なにつらそうな声出してるの。ほら、中也が入れたんだから中也が動いて」

「……っかってる、よ！ あ、ばか、胸いじんな……っ」

「だって私がヒマなんだから」

太宰は俺のはだけた胸元に顔を近づけ、薄桃色をした乳首に吸い付いた。すぐ乳輪の中に埋もれてしまうそれを吸い出し、口の中でこりこりと転がして、もう片方の乳首も指先で摘まみ、弾く。

「っ、はっ、はっ、はッ……きもち、い……」

充血してツンと立ち上がった乳首を今度は舌で上からぐりぐり押し潰されて、ざらざらした舌のひだに擦られると、勝手に腰がびくびく跳ねて、その度に中にいる太宰の性器を深く呑み込んでしまう。

「舌出して」

自分で動けと言われたから腰を揺らして太宰の雄を感じるのに夢中でいた俺は、そう命じられるまま素直に舌を出した。すかさず舌と舌が絡まり、俺の舌を自分の口にしまい込みたいにして唇を重ねられる。くちゅ、と唾液の交わる音がして、彼の喉がこくりと嚥下したのを見た瞬間、顔が燃えるように熱くなった。

「ねえ中也。君はずっと勘違いしていたんだろうけど」

俺が動くのに任せることに飽きたのか、太宰は俺の腰に手を添え、内部の感触を味わうように軽く抜き差しすると、感じやすいしこりを狙ってそれを突き上げた。

「~~~~ッ、はっ！ や…っ、ださい…！」

「私、別にサディストってわけじゃないんだよね」

ぐちゅ、ぐじゅ、と男根の挿挿に合わせて、後孔から泡立った水音が聞こえる。

雁高の先端が俺のナカでぎゅうぎゅうに絞られながら奥の行き止まりへ向かって押し進んでくるのが、喉元までせり上がる圧迫感で分かる。

自分の腸線から分泌された体液だけではなくて、この濡れぎまの理由には確かに太宰の先走りのカウパーがあるはずで、それが俺の体内に既に注がれている事実がどうしようもなく俺を興奮させた。

それを潤滑油にして、挿挿はどんどん容赦をなくしていく。

「あぁっ！ い、あうう…ッ！ だめ、だ、それっ！ また俺だけ…っ」

「君もさあ、自分のことマゾだと思っっているのだろうけど、…：真性のエムだっていうなら、キスされただけであんなとろとろの顔にならないよ」

たとえばこういうのもっと欲しいって思うはずだ。と言って、太宰は俺の首を強く掴んだ。鶏の首をはねる前のように指がめりめりと頸動脈に食い込み、視界に灰が降り積もっていく。

「あっ…：ガッ…：ぐうっ、う…」

#### 加虐性癖

SADISM。フランスの作

家サドの名にちなむ。

相手に苦痛を与えるこ

とによって性的満足を得る異常性欲。サド。

「はあ……ナカうねってる……はは、これじゃ論証にならないか」

片手で首を絞められたまま、ふっ、と息を吐いて下から突き上げられる。ぱちゅ、ぱちゅ、ともどかしい音を立てていたのが要領を得て、ぱんっぱんっぱんっとなんとなんと胎内をえぐる音に変わった。

「ひゅ、へう……っ、ん、ん、もうむ、いいッあああ！」

「マゾだっていうなら、さあ……優しくされたら萎えなくちゃ。叩かれるのも、後ろから抱き締められるのも、灰皿にされるのも、ふっつのキスをされるのも、全部気持ちよくなっちゃうんでしょ、中也は」

指の跡で赤くなった首筋を鎖骨から上へ舐められる。ぞくぞくと快感が走って、鼻から息が抜けていく。その一瞬だけ弛緩したのを見逃されなかった。さっきからノックされていた奥の行き止まりに大きく膨らんだ亀頭がめり込み、薄く開いた裂け目から侵入してくる。ぐぼっ、といけない場所へ受け入れた音を体内で聞いて、互いの間で揺れていた自分の性器から、タバパッと透明な汁が噴き出した。

「はああッ！ オっ……あ、ぎもちい、気持ちいい、なかはいっえ、れんぶ……っ！」

「っはあ……は、そう……よかったねえ……。ぜんぶ、気持ちいいね……」

なんでだと思おう？ と耳を甘噛みされながら問われた。

それは、さっき答えられなかった質問だ。

どうして手前じゃなきゃ駄目なのか。

痛くしてほしいだけなら、他にいくらでも相手を見つけられたのに。

「……は、——ッ、あうう、こわ、こわれう、もおはいんな……ッ」

繋がったところからぼたぼたと体液が零れてソファに染みを作る。そろそろ射精が近いのか、一層大きくなる太宰の陰茎に、自分の粘膜がしゃぶりついている。

「だざいっ！ 太宰、だざい……」

奥を突かれるたびに脳がブツ壊れる。俺を抱く太宰をちゃんと見ていたのに、瞳もぐしやぐしやに濡れていくものだから、俺は何度も名前を呼んでその男の唇を探し、繋ぎとめるみたいにして自分の唇をぶつけた。子供みたいなキス、と馬鹿にしながら、興奮を隠せぬ熱い吐息が応じた。

「あっ、あっあ、やべえ、いくッ、おかひくな、う……シンッ——！」

「……っ、ふう……ッ！ ア……すご……搾り取られる……」

軀をのけぞらせて絶頂に至った直後、最奥に熱い奔流が注ぎ込まれ、快感の波が何度も押し寄せてきた。太宰が結腸の入口が龜頭に吸い付くのを楽しむようにまだ精液を出しているペニスをごぼごぼ抜き差しし、俺はずっとイカされ続ける。

「し……ぬ……もお、だすなっ……え……」

「……ああ。そろそろお休みだね、中也。ここに置いて行くつもりだったけど……、予定変更して、別の場所まで運んであげる」

せっかくなんだから、もっといっぱい中出ししなくちゃもったいないからね。

そんな最低なことを言った口が、ちゅ、閉じかけていた俺のまぶたの上に落ち、俺はその瞬間に、何か答えが出かかったような気がして——意識を手放した。



遠くに汽笛の音が聞こえた。

ゆっくりと目を開ける。俺は車の助手席に横たわっていた。

「やあ、起きたね。今は朝の五時。もう少し寝ていてもいいよ」

「……手前の運転する車に乗ってたなら、ここは天国だな……」

「おやおや、手放して褒められると気持ち悪いね」

「皮肉で言ってるんだよ、スピード狂」

倒してあったシートを起こし、毛布代わりに掛けてあった自分の背広のポケットを探したが、煙草がなくなっていた。

背中がちよつと痛い。学校で太宰と行為に及んでいたときはまだ夕刻だったから、かなり長い時間眠ってしまったことになる。

周囲にはエンジンを落とした車が他にも静かに持ち主を待っている。コンクリートの柱を組み上げた隙間から、海沿いの赤レンガ倉庫が見える。ここは、その近くの商業施設の立体駐車場だろうと分かった。

「俺、テストの答えが分かった」

「テストなんてしたっけ？」

太宰が俺の目元に沁みついた隈を撫でたときの、指の感触を思い出し出していた。

幼い私の献身——か。そうか、そういうつもりで。

「……『死霊』は今も生きている」

「なんだそっち？ 君が眠っていた間に事故死したよ。現場写真あるけど見る？」

「そいつは前回の被害者のパーツで作った抜け殻だろ。いらなくなったガワを脱ぎ捨てて、新しい体に入れ替わった。だから、今回失踪した奴は死んでる」

「……だとしたら？ もう一回犯人を追って探偵社と張り合うかい？ 残念だけど、私にはそんな気はないよ」

「だろうな」

『死霊』を逃がしたのは、おそらく太宰こいっなのだから。

埴谷雄高の名前を餌に、死霊をおびき出した。そこまできて、まんまと目の前で殺されましたなんてこと、あるとしたら、分かかってそうした以外には考えられないのだ。国木田とかいう奴との会話から察するに、太宰の独断だったのだろう。

「別にこれ以上深追いする気はねえよ。ポートマフィアは手を引く」

何百年も姿を変えて生き続けている犯罪者が、昔一度名乗っただけの偽名にそこまで過剰に反応を示すものだろうか？ 『死霊』は男でも女でもなく、きつと埴谷雄高という人物であつたこともないのだ。埴谷雄高は、もはや自分という存在の輪郭を見失った怪物に唯一残された、意味のある他者。そう考えれば、わざわざリスクを冒して会いに来る理由も理解できる。

そんな怪物を逃がした男の心境も。

「俺が言いたいの、……あー、そんなことやってんなら、戻れよ裏切者」

「……ふふ。私がいなくて寂しいの？ その心の空白、もう一度埋めてあげようか」  
そう言っ、太宰は助手席に身を乗り出し、俺の下腹を手で撫でた。

「心の空白とやらは腹じゃなくて胸に空いてるもんじゃねえのか？」

「そっちは私の担当じゃないでしょ？」

太宰は試すような眼差しで俺を見つめた。たっぷり五分迷ってから、回答を言う。

「……………どっちも手前の担当だよ。俺は手前がいなきゃ眠れねえ」

「うゝゝゝゝん、まあ、部分点で五点」

何点満点の五点なんだ。

「あつ。なあ、手前が俺の指導役になったのも、手前の差し金だったのか？」

「そりゃあそうだよ。昔から潜入捜査がど下手だった君の余所行き演技を見て笑う  
絶好の機会だもの。私が逃すわけないでしょ」

「ほんと手前最悪だな……で、どうだったよ、よそゆきの俺は」

「もちろん笑ったさ」

太宰の顔が、内緒話をする距離まで近づく。「ついでに、興奮もした」と、俺にと  
っては百点の答えを出されてしまったので、両手を上げて降参し、その手で太宰の顔  
を引き寄せてキスをした。

「ならいいんだ。ご主人様」と言っ。

おわり

## 作文の練習

作中に登場した言葉を使って文章を作ってみよう。

・麻縄　・拘束　・鞭　・拷問  
・醜態　・監禁　・罰　・絶頂

## 研究ノート

著者がこの物語で書きたかったことは何か考えてみよう。

例　よそ行きの敬語中原（かわいい）

例　女子高生と中原（かわいい）

例　中原に「あっすっすみませ：！」とか言う太宰

例　C V 谷山紀章で「先生」って言う中原

例　C V 宮野真守で「先生」って言う太宰

# 私フォ5 開催おめでとう ございます！



抗えなかったのです。ある日わたくしの脳裡に、稲妻のごとき天啓があったのです。

次の私フォで出す小説、「今回は太中の教科書みたいなやつを作りました（キメ顔）」ってお品書きでかましておいて、いざダウンロードしたら「いや教科書ってそういう意味かい！」ってなるのを作ったらのしいぞ（私が）～～！！っていう……エンジョイの気配に…抗えませんでした…。

その出オチ芸のためだけに何日も徹夜し全力を尽くしましたが、いよいよお品書きを書くという段階で「どうしよう…誰か本気にして『この人太中のお手本みたいな小説書いたとか言ってる草』とか思う人がいたら…」という恐怖で冷汗がとまらなくなり、「太中の、教科書」と読点を打ってしまいました。

私は臆病な人間です。本文のフォントも教科書体で書きましたが、このふざけた性格とまっったく相性が悪いものでしたから、もう二度と使いません。これで、私の懺悔は終わりです。

高等学校卒以上  
現代文DN  
ハルウララ

令和四年三月二十六日発行

著作者 繪子

発行者 うしろがみ

文豪ストレイドッグス

二次創作 太宰×中原  
PDF無料ダウンロード作品

支部 2660047

この本は個人的に作られた非公式ファンノベルです。原作者様・出版社様とは一切関係ありません。  
無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載を禁じます。このPDFファイルを意図せず入手された方はデータ削除をお願いします。

Thank you!

20220326

私を信じてオンリーを開いたのかい？

～ふたりぼっちのフォルクローレ～

5

A stylized, cursive signature logo in a light pink color, consisting of the letters 'L' and 'L' intertwined.

うしろがみ

